

歪な生命体

小林大輝

齒車の欠けた歪な生命体が

ぼんやり歩いている

油のないブリキの腕を振りつつ

もう何年も動作を続けている

齒車の欠けた歪な生命体は

さみしい浜辺を静かに歩いている

浜辺は今日もおだやかで

だけでもどこかなしい白浜で

昔の文明の残骸のみが堆積している

古ぼけて反射を忘れたレンズには

昔見た一枚の写真のみ投影される

なんとなく幸せそうな顔の写真

なんとか思い出そうとするのだけでも

写真の顔がドロリと解けて猫になる

ネズミになる

犬にも見えるし

赤子にも見える

古ぼけたレンズに

顔は映らない

覚えられない

なぜだかとてもかなしい気持ちが

空虚な胸をたたく